

グローバル・フェミニズムズ：
女性によるアクティビズムと学問の比較事例研プロジェクト

地域：日本

話し手：苅米照子

聞き手：吉浜美恵子

場所：Koriyama, Fukushima, Japan

日付：2021年10月4日

ミシガン大学 女性・ジェンダー学研究所

(University of Michigan Institute for Research on Women and Gender)

住所：1136 Lane Hall Ann Arbor, MI 48109-1290

電話：(734) 764-9537

メールアドレス：um.gfp@umich.edu

ホームページ：<http://www.umich.edu/~glblfem>

© Regents of the University of Michigan, 2021

菊米照子

2007年「女性の自立を応援する会」設立（2012年にNPO法人化し「ウィメンズスペースふくしま」と改称）、代表理事を2019年まで務める。元郡山市母子福祉センター所長。2011年東日本大震災後には、福島県最大の避難所となったビッグパレットで「女性専用スペース」の運営に関わる。2012年2月、内閣府主催の「東日本大震災による女性の悩み・暴力相談事業」として電話相談、面接相談、サポート・グループ活動、ジェンダーに基づく暴力に関するワークショップを開始、現在も継続中。

吉浜美恵子

ミシガン大学 社会福祉学大学院教授。社会福祉学博士。社会福祉士。性暴力の防止と女性の安全の促進を研究テーマとしている。夫（恋人）からの暴力調査研究会の共同設立(1991年)、日本初のドメスティック・バイオレンスの実態調査、フォーカスグループ調査を経てドメスティック・バイオレンス被害者支援のサポートグループの立ち上げと共同運営 (1998年)、東日本大震災女性支援ネットワークの共同設立 (2011年)、災害時の性暴力に関する初の研究調査 (<http://risetogetherjp.org/?p=4879#more-4879>)、被災した女性とともにフォトボイス・プロジェクト (<https://photovoice.home.blog/>) の実施など、日本で長年に渡りアクション・リサーチを行っている。

Mieko Yoshihama: 今日ウィメンズ・スペース・福島の苧米照子さんをインタビューします。苧米さん、よろしくお願いします。

Teruko Karikome: 今日皆さんよろしくお願いします。

MY: 早速なんですけれど、苧米さんのこれまでの活動、長い長い活動の軌跡っていうのかな。どんなきっかけで活動を始めて今までどんなことをされてきたか。お話しくださいませんか。

TK: 私は高校生の時に祖父母宅から学校へ通ってたんです。その時に祖父母から言われた事がね、女には三従の教えがあると。三つの従う。子は親に従い、嫁いなら嫁しては夫に従い、老いては子に従えっていう風に、女はね、三従の教えがある。それから女、三界に家なし。もうね。

過去現在未来に女が落ち着く家はないんだ。それから、男の馬鹿と女の利口が釣り合うんだ。そういうことをたくさん言われてね。自分の進みたい進路についても、お医者さんとか薬剤師とかになりたいなあと言ったら、「女がそんな仕事についてはだめだ」って、なんとなく、それでも病院に関係する心理学を専攻したらね、ちょっとはその病院で、病んだ人とか自分が力になれる人に会えるんじゃないかと思って大学で心理学を専攻して、そして、卒業と同時に精神科の病院で10年ぐらい勤めるんですが、その後10年ぐらいして、障害児の施設で3年間働き、その後、母子福祉センターというところで、12年働いて、そして定年を迎えて、人権擁護委員とか家事調停委員をして、力を誰かに貸してもらったら、自分の意見が言えるんじゃないかとか、自分らしい生き方ができるんじゃないか。そういう人がたくさん周りにいるなあと思って、色んな所にぶつかったりして、今日まで来ました。

この後でもお話しするんですが、私が一番影響を受けたというのは、1994～5年に福島県のあるところで、18歳の女の子が小学校の高学年から18になるまで、実の父親とその友人から性虐待を受けたこと。その裁判支援をしたのが女性支援の始まりだったかなと思います。その後もまた裁判支援するのですが、それが自分の方向と言うか、それを考えるきっかけになったのは、1994～5年に起きた「R子ちゃん事件」っていうんですけど、そこに出会ったことかなーそれで今があるのかなと思います。

MY: そっかー。その女性の人権。女性が自立して生きることの大切さってのをすごく感じて、それをこう形にしてきたんですよね。今はウィメンズ・スペース・福島っていうけど、その前が「女性の自立を…支援、応援する会」だよ。それがね、言い得ていると言うか、ね。

TK: その「女性の自立を応援する会」を設立したのも…。設立して、すぐです。あの、DVの被害者だった、お母さんが、ある時、自分が死ぬよりも、夫を殺した方が解決するんじゃないかと思って、自分と娘で夫を殺そうと考えるんだけど、夫は寝てると思ったら起きててみんな聞いてた。それで、返って暴力を振るわれて、それで女性のための相談支援センターに逃げて。それで、彼女の裁判支援もして、ちょうど私たち「自立を応援する会」を作ったので、彼女の支援、裁判支援とかカンパを集めて、それをして未だにそれが2007～8年なんです。未だに彼女とは付き合いもあるし、彼女、なかなかその生活保護を受けながら自立はしてるんだけど、時々寂しくなるんだね。お店からなんかビール盗ってきちゃったりとかね、その都度、私も一緒に警察に行ったり、お店に謝りに行ったりはしてるんだけど、なかなか放っては置けない。彼女ももう50いくつにはなるんだけど、なかなか放っては置けないという人たちが何人かいるので、このNPOとは別に個人的にもお付き合いはしてきています。

MY: そっかあ。だから定年退職したとはいえ、全然定年退職じゃないわけね。余計忙しくなったかもね。

TK: はい、はい。定年退職してから人権擁護員とか家事調停もしましたので…。それと、後ちょうどね、NPOにもなったのが2012年でしたので。今、若い人に代表していただいているので、その分はとっても楽なんだけれど、それまではずっと一日中頭がね、夜な夜な寝言を言ったりして、夫が「お母さん、お母さん、どうした、どうした」って毎晩のようにね、言われるような日々でした。

MY: そうだよな。寝ててもね、心はそちらに行ってるから、休む暇がなかったですよ。今、女性の自立の話が出たけど、日本で女性が自立して生きていくっていうのは非常に難しいですよ。

TK: 今電話相談もしてて、とにかくDVだけれど、一人では生きていけないってもう端から女性は我慢するしかない、ここで生きてくしかない。だって私働いてないしお金もないし。子どもがこの先ね、教育受けるのに、私ひとりではとても高等教育を受けさせることはできない。そんなふうにもう、端から諦めてる。だから私は夫が怒らないように、毎日夫のご機嫌を伺っていく。そうしかする方法がない。そんな風に言う人がたくさんいます。だから、経済的な自立っていうのはね、本当にパートでもなんでもいいし、福祉制度もあるんだけど、そこに目が向かない。選択肢がない。

MY: 選択肢がない。で、働いて自立したいけど、賃金格差は非常に大きいし、女性は
その非正規雇用、パートであったり、期間限定であったり。不況になれば一番先に首
切られる。そういう構造的な不均衡があるから、どうしても自立が難しい。したくて
もできない。一生懸命働いていればセクシャルハラスメントはあるし。マタハラはあ
るし、ね。そういう現状の中、この活動を続けてきて...、何が苺米さんを続けさせてき
たんだろう？

KT: 私、相談してる人にね、孤立無援じゃないよって。私はあなたのことを知ってるよ
。あなたの話を聞いたことあるよって言うと、本当にね、「私のこと覚えててくれたの
」って凄く喜ぶ。私達も相談を受けてて、誰か隣にいてくれる。そうすると、私たちも
孤立無援ではない。一人でやってるんじゃない、終わったらすぐにお話ししてね。お互
いに共有できて、知らないことで、病名とかね、そういうの言われたら、隣にいる人が
パソコンですぐ調べてくれて、「この病気ってこんな風だよ、こういう治療法があるら
しいよ」とかって情報がすぐに来るので、孤立無援じゃないというのが、私たちも続け
て来られた元かなと思います。

MY: そうだね。でも、続けてきて、色んな大変さ、色んな苦労があったと思うけど、
例えば、その世間の対応と言うかさ、反応はどうなんですか。

TK: 私達市役所と一緒にね、協働で男女共同参画を進めようという風に提案した。その
審査会が8人審査員がいるんです。全員男なの。男女共同参画を提案してるのに、審査
員全員男なの。市長を始め副市長なんか部長、全部。

MY: 全然、共同参画じゃないよね。

TK: ないの、ないの。それを市長のいるところで、あるところで、「審査員全部男でし
た。男女共同参画なんて、道遠いです」って言ったら、なんか市長は気に入らなかった
みたいで...。だって、本当にね、8人全部男の人の前で提案して、市長はね、「自分た
ちも昭和の生まれだから、そんなことは勉強して知ってる」って言うけれど、でも、知
ってる割にこれですかっていうぐらい...。

MY: 知ってたらね、そこから改善するはずなのに。

TK: それが不思議。

MY: 震災のことを話しましょうか。2011年3月11日。

TK: あの、すごい揺れだったし、みんな本当にね、外にも出られないし。それで、みんな一人一人が気をつけて。だって水道も止まったし、電気も止まったしガスも止まって。そして品物が皆無くなってしまう。その中で生きていくっていうことが大変なことで、それぞれ皆あのどっか避難しましょうって言ったって、高速道路が通ってないし、電車は走ってない。バスも走ってない。飛行機も飛んでない。そういう状況で、みんなそれぞれガソリンも無いからね。

MY: ガソリンも無い。で、最初の数日..数日というか、あの電気もなかったから、情報もなかなか入ってこなかったでしょ。

TK: それがね、私のいる所はそんなにひどい...揺れたのは揺れたけれど、街中ほどではなかった。私のいるところは、電気も水道もガスも通ってたので、そういうのが通ってない私の妹の家族とかは、お風呂入りに来たり、ご飯食べに来たりしてるし、隣の方は岩手が実家なので、これから行くっていうので、その時、私はおにぎりをたくさん作って、それを持ってってもらったりね。その時に本当に誰かがいたら助かるということだね。やっぱり一人じゃダメ。

MY: そっかあ。

TK: 一人じゃダメ。だから、日頃色んな繋がりをね、隣の奥さんとも仲良くしてたし、これから岩手行くんですって言ったら、「じゃあ、おにぎり作るから、ちょっと待ってて」って言って持って行くけど、全然知らない人同士だったらね そんな声も掛けないし、だから、彼女も途中でコンビニで買おうと思ったって言うけど、コンビニなんて開いてませんよ。福島から宮城から岩手に行くんだからね。だから、それもその時も、本当に一人じゃない、孤立無援じゃないっていうのが大切だなあという風に思ったし、震災で、もう私も娘も避難させて、その時に、「家族が避難した。じゃあ私ここにじっとしてていいのか」となんかね、わさわさする感じがした。何もしないでいいんだろうかな。

丁度一ヶ月目くらいまでに有志で集まって、「どうも、女性が寝る所に男の人が出入りしたりね 男の子がパンツ下げられたりしてるらしい」。で、すぐにね、4月12日に富岡町と川内村の防災本部行って、あと郡山市の市役所にも行って...。母子寮っていうのが空いてるんですよ、郡山市は。もう38世帯入れるところが4~5世帯しか入ってない。だから、そこに入れてください。でも、「住民票がなきゃダメだ」とかね。信じられないような...。「前例がない」って、前例がないような震災が起きたのにね。

MY: そうなの。ねえ。

TK: そんな風に言っている。だから、これは聞いて、「やって良いですか」とか「相談の場所をどっか決めてください」って言ったってダメだと。直接ビックパレットに行って、支援物資が山のように積んである片隅で、相談コーナーを作ったんです。だけど、人の目もあるし、耳もあるので、なかなか来ない。来るのは、「子どもの学校どうしたらいいだろう」とかね。「送り迎えしてくれる保育園あるかな」とかね、「コインランドリー近くにあるかい」とか、そういうのが。それで、県が「4月の末に女性専用スペースを作るんだけど、協力してくれないか」と言われて、じゃ私たち今まで何回かやったので、私達やるけれど、朝9時から夜9時まで毎日なので、私たちだけではできないので、他の団体もね、婦人会とシングル・マザーズ・フォーラム・福島という所の三つの団体で、交代で女性専用スペースの留守番をしながら、みんなとお話してという風になって、初めてね、女性専用スペースができたっていうのが経過でしたね。

MY: そっかー。4月末っておっしゃいましたよね。だから地震が起こったのが、3月11日だから、一か月半かかったんだよね。その女性専用スペース、三団体で交代でっていうのも、それも大変だったですね。

TK: そう、私たちは朝の9時から夕方4時ぐらいまでにしてもらって、夜はね、みんなが車持ってるわけじゃないので、誰かに便乗してビックパレットまで行くから、私達はせいぜい4時か5時で終わらせてもらう。だけれども、団体によっては二交代三交代にするので夜までいられるという風になっている団体もありましたね。

MY: そこでは、どんな相談とか悩みが寄せられましたか？

TK: そこでもやっぱりいろんな人が来るのでね、同じように、「子どもの学校はどこ」、「保育園はどう?」、「美容室はどこがいいだろう」とか、「病院はどこに行ったらいいだろう」。それから後、「自分が東電の社員だから、私はここにいる資格はないの」って言う人がいたけれど、「あなたの責任じゃない。これはね会社が起こした事故で、あなたが引き起こしたことじゃないよ」って言ったら、その人本当に誰もいない時、見計らって来たので、本当に涙してました。あとは、離婚した夫が、町をあげて避難してきてるのでね。同じこの体育館のようなところにいる。そういう相談だとか。それから、外からね。どうも弁護士もそのうち、相談始めたので、避難した人じゃない人がね、あの外国籍の人が、DVの相談に来たりとかね。それぞれ皆さんに少しずつこう知れ渡ってくるんですね。どうもあそこには弁護士も来てるらしいとね。

もう、女性専用スペースは、「自分のズボンの裾を上げたい」とかね、たまに「昼寝をせいせいしたい」と、自分の部屋でちょっと昼寝をしてみたりとかね、「ボタンをつけたい」とか。特に日常生活をスムーズに行きたいという女性たちの願いで...。「手がガサガサになっちゃった。ハンドクリームがあるといいな」とかね・「リップクリームがあると助かる」とかね。そういう声もたくさん聞いて、それで、そのうち下着の会社がね、ああいう時に本当に必要でなくても高級な下着を寄付して下さったんですよ、下着メーカーさんが。

MY: ああ、そう。

TK: それがね、すごく女性たちが使っても使わなくても、高級な下着を手にしたというので。そう言って喜んでたね。

MY: そっかあ

KT: ああいう時は、私達、すぐ「エプロンが必要だろう」とかね。でも、そうじゃないんだね。

MY: そうだね。そういう生活必需品も必要だけど。ね、その美しいものとか、贅沢なものって、それも...

TK: 癒やされる。

MY: 大事なんだよね。学ばせてもらったよね。

TK: 使わなくても持ってるだけでいいの。

MY: なるほどね。

TK: だからね、その下着のメーカーさんには本当に感謝して。みんな自分で採寸してね。とても使ってないだろうと思うような人も...

MY: そうだね見たことも身につけたこともないかもしれないけど、でも、そういう大変な時だからこそ、そういう心遣いというのかな... 嬉しいんだね。

TK: うん、凄く嬉しい。それは本当に学びましたね。私達は本当に「リップクリーム必要だろう、ハンドクリーム必要だろう、エプロンがいいかな」なんて思うけれど、そう

じゃなくてね、あんな手に持ってるだけ、バッグに入ってるってだけで嬉しいんだなあというのを学びましたね。

MY: 今、あの、分断の話が出たじゃないですか。今回の原発事故で、東京電力に勤めていたとか、「原発を推進した、しなかった」、そういう亀裂もあるし、福島を出て避難した人、福島に留まった人。

TK: はい、はい。

MY: なんか、そういう分断が…。「どう感じますか」っていうのは変な質問だけど…。

TK: あの、それはね、分断させられたと思っているの。敵はここなのに、なんかみんな近くにいる弱い人にぶつけて、自分のストレスを解消しよう。敵はここですよ。敵はここなのに、本当に身近にいる人。「あの人は避難していいね」って。「私だってしたかったけど、できなかったよ」。そんなのはこの人に関係ないんだけど、本当に分断させられてしまう。

MY: あの、「分割して統治せよ」って言う、そのものだよね。敵は上の方で、こう…

TK: 思うツボですよ。なんかこの人たちも思うツボで、みんながね、分断して、人の悪口を言ったり、賠償金もらってどうとかってね。

MY: そうだよね。その賠償金だって、居住地区が一つ通りを隔てた、その違い？ 空気は行ったり来たりしているのにね。

TK: だからね、分断させられてるなあと思います。そして、それが思うツボ。そうやってみんな力を分散したら、ここに向かう力がなくなっちゃう。それでもその中でも裁判をしている人がたくさんいるけれど、裁判をしているある高齢の方から電話を頂いて、「自分は本当はしたくないんだ」って。「どうせこんな10年も20年もかかって、もし勝ったとしたって、せいぜい100万円ぐらいだ。だから私はしたくないけど、周りの人がみんな裁判にあんたも混ざりなって言うから、私は一緒にやってっけども、支援して下さる弁護士の先生とかね、活動家の方達が熱心だから、だけど本当言ったら私はこんなをしたくない」って。だから、そういうのもね、人に言えないの。

MY: 言えないねー。

TK: 言えない。だって、みんなで戦っているのに、「あんたなんでそんな事言うの」って。でもその人も70過ぎなので、「裁判が終わる頃まで生きてっかどうかわかんない」って。けど、それをどこにも言うところない。でも、ここに言ったので、ちょっとはあの気持ちが吐き出せたけど、誰にも言えない。本当にこう電話があってよかったなあと思いますし、ここなら匿名でね、こちらも名乗らないし、向こうも名乗らないので、どこにもお知らせも何も行かないから大丈夫だよって言うと、「よかったあ。近くの人には話せない。家族にも話せない」。

MY: そうだね。近い人には余計話せないですよ。家族とかね、地域の人とか。

TK: みんなでまとまって裁判やってるのに、ウチの母ちゃん何でそんなこと言うんだろなって言われてしまうし、もう夫婦喧嘩にもなるし、親子喧嘩にもなっちゃう。

MY: そうだね。そしてまた分断されていっちゃうんだよね。

KT: そうです。はいはい。だから本当に、[分断]させられてるなと思うし、それは本当にこう責任を取らなきゃなんない人達の思うツボだなと思うけど、言えば、少しはね、あの「せいせいした？」って言うと、「良かった。今まで誰にも言えなかった」って言うので、それがちょっと良かったかな...
言っても解決はしないんだけど...

MY: しないよね。

TK: うん。解決はしない。

MY: だって、本来なら裁判を起こさなくたって保証されるべき権利だよ。

TK: そうです。ちゃんとかこういう方針で、ごめんなさいってしてね、これで勘弁してくださいとかっていうのをちゃんと言えば、みんなね、裁判をしたりいつまでも怒ったり[しない]。「そっか、そういう事なら少し我慢しよう」とか、「別のところで暮らそう」とかってなるけど、我慢のしようがない。それがね、彼女たちの苦しみだなあと思います。

MY: そうだよ。このインタビューを見てる人たちのために、その裁判の、例えば内容。国を相手取ってとかね、東電相手に何を求めて...

TK: 地域を返せ、生業を返せ。地域を返してほしいよ、ね。あそこで住めるようにしてほしい。

それから自分の生業がなくなってしまった。今までの仕事もできない。農業もできない。漁業もできない。会社も潰れてしまった。それは、そこを帰還困難区域で人が住めない。だから、地域を返してほしいよ、生業を返してほしいよというのが大きな希望です。

MY: うん。ね、ほんと基本的人権だよ、保障されるべきね。

TK: 日常生活を取り戻したいというだけです。見知らぬ土地でね、不安を抱えて心配して心細い思いして暮らしている。ここでなくて家にいたらこんな思いしない。その不安とか心細さ。それから人間関係がやっぱり一番辛い。だから避難する時は地域ごとに避難すれば、話も合う。だけどあの時みんなバラバラにね、自分の知人とか親戚を頼って行ってしまったので、全く知らないところにポツンと暮らす。

MY: ねー。それで何回も何回も引っ越ししたり、いろんな避難所をね、転々としなきゃならなかった。

TK: もう10回もしてる人もいるしね。私たちのフォトボイスの仲間も7回くらい引っ越したよっていう人もいるし。旅行でね、どっかに行ってお家に帰ってきて、「やあ、やっぱり家が一番いい」ってみんな言うけど、それがない。帰る家がない。そして旅行じゃないから、自分の意思で行ったわけではない。止むを得ず国からの命令で、ここはいられないから避難しなさいって言われた。それをね、国はきちんと責任を正して、ごめんなさいをして保証をしていくべきだなと思います。みんなの気持ちを聞いてほしいと思う。

MY: 震災から10年経って今福島を取り巻く状況は？

TK: そうだね、21世紀は人権の時代だって言われてるんだけど、なかなかその人権っていうのがね…。実は、私はその後1997年からキャップってチャイルド・アソルト・プリベンションという子どもへの暴力防止プログラムをしてるんです。その権利の考えがすごく気に入って、そのキャップに出会って権利を知ったということが私の今までの根底にあるかなと思ってるんです。始めた時に、この人権教育が広まるのに100年かかるねって言ったけど、もう20年以上過ぎてんだけど、なかなか広がらなくて…。基本…こないだのね、コロナのあれでも「誰か陽性になった」って言うと、みんなコソコ

ソってしゃべっちゃうのね。「あの人なったらしいよ」って。それは基本的人権だし、個人情報保護ですよって。それが身につかないね。

MY: そっかあ。

TK: 基本的人権がどんなに大切なことかっていうのを伝えたいなあとって、こないだ、今私たちの電話相談で、今何人か増やそうとしているんですが、そこで本当に「根拠のない噂を流すのも人権侵害だよ。名誉毀損になるよ」ってということね、こう言ってきてるんですけど、なかなか「教育の計は百年」って言うけれど...

MY: うーん。

TK: 100年かかってちゃんとみんなに伝わるかなと、ちょっと心配です。

MY: そうだねー。今、コロナ禍の話が出たけど、10年前の震災、大きな災害があったけど、コロナ禍もまたある意味で大きな災害、社会的な災害ですよ。それがどう女性の安全とか、女性の人権に影響を及ぼしていますか？

TK: そうだね。女性がとにかく家の仕事を一気に引き受けてるわけですよ。だから女性が病気になったら、もう家族全体がねパンクしてしまう。だから、本当に日頃からね、お父さんもおじいさんもおばあさんもみんな家事を分担してやっていないと。震災があった時もそうでした。女性の仕事ってなってるので、震災もコロナ禍でも女性が安心して休めない。

MY: そうだね。ただでさえ女性が家事とか介護育児の重荷を背負ってるのに、災害が起きるともっとその重荷が増える。

TK: そうです。子ども3人もいたシングルマザーのお母さんが、「私がコロナになったら子どもをどこに預けよう。預かってくれる人ないですよ」。ね、それで一番ちっちゃい子ならって預かって貰ったら、実はその子も陽性だったと。生後何ヶ月ですよ。そのうちの人も陽性になっちゃう。

MY: そうだね。

TK: だからね、本当に女性も男性も、誰も病気になった時に安心して、一人で背負い込まないで済む。震災の時も、誰かに負担がかかるんじゃなくて、みんなで負担を分担し

ましよう。と、日頃から男女共同参画が広がっていれば、ちょっと女性がね、こんなに悲しい辛い思いをしなくて済むのになあと思いましたねえ。

MY: そうねえ。女性への暴力はどうか、コロナ渦。

TK: 特にコロナ渦っていう...あの、郡山ではね、一番最初、女性がそれはすぐニュースで、どこどこ誰ってまでは言わないけど、どこどこで務めてる人らしいという風に、もう凄い勢いで噂が流れて、そして、その人の勤めてる所の他の人までね誹謗中傷される。ということで、これがまあ女性だからっていう...男性でもそうなんだろうと思うけれど、特にその時は女性だったんですよ、最初。ニュースでも流れてしまって、どこそこに勤めてるというのも流れてしまったので、私、女性だからこんなに言われちゃうのかしら。これが男性だったら違うかなと思うぐらい、ひどい言われようで、それこそ、本当に根拠のない噂話もね、人権侵害ですよっていう風にみんなが思ってないと駄目だなあと。特に女性も男性もなんだろうけど、あの時思ったのは、女性だったんです、最初はね。

MY: そうか。

TK: 特に、田舎って言うかね、東北なので、余計そういうのがね。私が昔おじいさんに言われたようなことも、まだ脈々と根付いているんだろうかという風に思いましたね。

MY: そっかー。あの、さっき電話相談の話が出たけど、震災後ね、2011年の震災後に、あのウィメンズ・スペース。福島。法人化したのが2012年？

TK: 2012年の12月です。

MY: で一、あのその頃は、えっと日本政府と一緒にその電話相談を？

TK: そうです。

MY: そうだよな。それはどうでしたか。

TK: 私たちも内閣府も初めてで....

MY: 初めてだよな、そんなことなかったよね。民間と協働して電話相談なんてね。

TK: そうなんです。それで、やり方がね、最初は時給はこれで、人を集めるようになって言われて、急にこう集めたので、相談にも慣れてない普通のおばちゃんも何人か入っているし、専門家を急に集めることができないし、専門家を養成しては来なかったのも、急に集めて時給がこれだって言うので、10何人集まったんです。それを3~4年。それで、応援に来るフェミニスト・カウンセリング学会だとか、シングル・マザーズ・フォーラムの本部だとか、シェルター・ネット、それから日本女性会館協議会の人達が応援に来てくださった。その人たちが応援に来てる間は、最初に言った時給でやってたんですよ。ところが、もう応援派遣はなくて、地域の人たちだけで相談を受けなさいって言ったら、途端に時給半分。

TK: ひどいでしょう。未だに半額の...

MY: ありえないね。

TK: そして、家賃も半分しか出さない。光熱費も半分しか出さない。それでも私たち辞めずにやってる。で、今年からは内閣が手を引いて、福島県の復興庁から復興予算が来るんだね、福島。その中から福島県が主催で、今までは内閣府が主催だったんだけど、福島県が主催で今年から。で、NPOの私たちにやってもらうっていう風になってんだけど、内閣府で決めた時給とかはそのまま。でも、家賃は県は全部出してくれますし、光熱費も出してくれるっていう風になったので、それは助かるんだけど。県もNPOと仕事するの初めてなんです。だから難しいこと言われたり、仕事はすごく県の人達も初めてなので、なかなか進みが遅かったりするのだけれど、みんな我慢してね、本当によく働くなあとと思っていますし、若い人がいろんな情報を集めて助成金をとったりね、色々な所に提案をしたりしているのですごく心強く思っています。でも、とにかく内閣府のやり方はひどい。

MY: 酷すぎるね あからさまな差別だよ

TK: だから、全国から応援に来てた人がいる間はこの値段。でも、全国の応援なくてお前たちだけでやれってなったら、突然に半額って、家賃も半額って、光熱費も半額って...

MY: だってニーズが減った訳じゃないんだからね。

TK: 毎年1000件はあるし。

MY: そうだよね。

TK: だから、なんだろうなあと、こんな風にね、最初はね、内閣府も一緒に来てお家を探して、後々ここがいいねって言ったのに、あとになって、福島県のアパート代が高いとかね。高いんですよ。だって震災でみんなね、わあーっと中通りに来たので、需要が多くなったから家賃が上がったんですよ。そんなところを私達も借りてんの。だけどね、なんかインターネットで調べてね、もっと安いところがあるとか言ってくるの。

MY: なんだからね、税金を無駄遣いを他でいっぱいしてるのにね。

MY: **And yet I'm sure they're wasting taxpayer money in all sorts of other ways.**

TK: そうです。それで復興予算余ってるって言うてるの。

MY: そう。使い切って無いんですよ。

TK: だってあたしたちの半額出して欲しいよ。

MY: だってそんな大きな金額じゃないんだからね。

TK: そうですよ。

MY: 国立競技場建てるお金があるんなら、どうにかして。

TK: あんなもんじゃないですよ。

MY: 復興オリンピックと言っていました、どうでしたか、オリンピック。

TK: あのー、みんなね、応援する。本当に気持ちのいい人達がたくさん日本にはいるんだなーと思って、応援してるし、福島もね、歓迎のセレモニーみたいのもやったけれども、まあ無観客でやるだけっていう風でしたけど。みんな本当にね、あのこれで本当に復興するだろうと思ったけれど、福島でやったのはちょろっとね、予選の1～2回だけで、肝心なのはみんな別のところですよ。

MY: あ、そう。

TK: 予選の1～2回だけ。どこが復興なんだ。だからね、みんながっかりしてたし、コロナの中で、あんな中でやるって言うこと自体がね、みんな無理がありますよね。

MY: そうだね。

TK: 無理だったなと思います。

MY: だいたい、東京にオリンピック誘致する時から無理があったんですよね。

TK: そうです。

MY: だって、あの誘致の時に、招聘決まった時に、“**Fukushima is under control.**” とかね、福島はコントロールできてるなんて言ったけど、全然コントロールできてなかったよね。

TK: 全然ですよ。だって、今になって、地下水を流す、それは岸から1 kmぐらいね、海の底をずっと管を通して、そこで水を1km先で流すって、何言ってるの。本当に何言ってるの。

MY: うーん。

TK: それだって反対ですよ。漁業してる人たちはね。ずっと風評被害に悩んできたのに、それをやっぱり海に流すしかないんだ。それで、すぐ流すのは何だから1kmぐらいずっと沖に。

MY: またそこでお金かけてね。

TK: そうですよ。

MY: 意味がないねよ。1km先でも、水は流れているのに。

TK: そう、そして、本当に今でも1号機、2号機、3号機の計測器が壊れてたとかね 電気がつかないで何ヶ月もいたとかっていうので、一体ね、そのどんな仕事してて、本当に真面目に直して復興させようとしてるのかなって、もうみんな白けています。お金はどんどん使ってたよね。どこに使ってるのか、もっと見える所に使って欲しいし、本当に日常生活を取り戻したいって言ってる。それで、ちゃんとね、あの福島地裁も仙台高裁も、「いや皆に50億でも少ないんだけどこれを出しなさい」という判決がでると、必ずまたその最高裁にね、上告する。

MY: ねー上告するね、

TK: また何年もかかっちゃう。だから解決の日の目を見ないで、みんなね、いなくなっ
てしまいますよ。

MY: そうだね。うん。

さっきから人権の話をしてますけど、まあ人権とか、あとフェミニズムね、色々あの
話題になるけど、苧米さんにとってフェミニズムってどういうこと。どういう意味が
ある？

TK: はい。私ね、今までに大きな出会いっていうのはキャップに出会ったことと、フェ
ミニスト・カウンセリング学会に出会った事が、私の人生で大きな出会いだったなと思
います。対等学会、それから女性同士の連携だとかね。そういうので、個人の問題は私
の問題じゃなくて、政治的・社会的な問題だって言われて、ああそうか、私が悪いんじ
ゃないんだっていう風にね、こう思えるようなアピールがあったっていうことで、私の
娘もすごくフェミニズムに出会ってよかった。生きやすくなったって言ってるし、スタ
ッフの中でもね、フェミカンのみんなと会って色々教えていただいたことで、自分の家
庭生活で、例えば子供の世代と一緒に同居してたりとか、親世代と同居してた時いろい
ろ腹が立ったりね、こう色々言いたいんだけど、「そうか、フェミニズムであって、
私は私でいいんだとかね、対等でいいんだ」っていうのを知って生きやすくなったっ
ていう人が何人もいるので、凄く感謝してるし、

それから、PTGって先生もおっしゃるように、フォトボイスの吉浜先生や湯前さんに出
会ったこととか、フェミカンの人に出会って...。その震災後ですよ。震災がなかったら
、先生たちにも出会えなかったし、フェミカンの人達も出会えないし、関西の人とか、
こんなアメリカにいらっしゃる人とお話するなんて、本当に、なあ。

MY: そうかー。

TK: それはすごく大きな出来ごとでしたよ。

MY: そうだね。

TK: もうすぐ人生終わる年なのに、こんな60過ぎ70ぐらいになってね、こんな世界的な
先生方とお会いできてお話しできて、それで自分もアピールが出来るなんてね、すごい
。それこそPTGだなあとと思います。

MY: Post-Traumatic Growth. ね、トラウマの後の成長。よくね、PTSDって言ってトラウマの後の...

TK: 心的外傷、後遺症。

MY: 後遺症は言うけど、その成長、それを...、まあ悲しいけどね、そんなもの、トラウマがなければ一番いいんだけど、こういう震災原発事故っておっきなトラウマの後で、そのたくさんの女性が新しいことを始めたり、苦しみを乗り越えて成長してったり。あと、さっきからお話があるように、人と人とのつながり、女性のグループであったり、地域のグループが団結して「これおかしいよ」って言って、社会正義を訴えて行ったりとか、そういう動きは見えたとね。

TK: だから、それはすごく大きなことで、震災がなかったら知らないことだったし、会えない人達だったので、震災は二度とあってはならないことだけれども、あの震災がなかったら本当に会えなかった。あの時にビッグパレットの中に湯前さんたちがいらして、フォトボイスって何だろうってね。怪しい人...あの時、色んな人が来たのでね。

MY: 一体何だろうと思ったよね。震災でみんな大変な時にね、あのビッグパレットという大きな避難所に行って、「フォトボイスに参加しませんか」なんて言って、でも...

TK: 怪しい人かなって。でも、私、前に湯前さんは御茶ノ水女子大学で講演会あって私聞きに行った時に、湯前さんのお話を聞いたことがあったんですよ。

TK: 震災のずっと前にね。いやー湯前って名前は、あの時聞いたあの人かなと思って。怪しい人じゃないかなって。

MY: いやあ、でもさ、あの時もとにかくすごい大変なときだったでしょ。女性専用スペースを切り盛りしてね、自らも放射線、放射能浴び。ね、大変な時。でも、始めて...

TK: 本当に、出会って、ビッグパレットにいた時に、女性会館協議会さんが助成金を出すから、ここでやってるような茶話会を仮設住宅でもやったらいいだろうとかね。私はその申請書書くのがすごく苦手で面倒くさいし、そんな申請書書くんなら手弁当でやるよって言ってたんだけど。ビッグパレットは手弁当でやってたんです、私達は。

MY: そうー。

TK: うん。他の団体はこう上部団体があるらしくて、そこからお金が回ってきたらしいけれど、私たちは単なる民間団体だったので、手弁当で交通費も自分で出してやってたので、それが市民活動だと思っていた。

MY: いやー、でもさー。あちらから働きかけてきたわけでしょ。女性専用スペースやりませんか。市？郡山市？

TK: そうそう、県。

MY: 県？県か。手弁当で協力だけを求めるわけ？

TK: うん、なんにも言われなかった。お金出すとかなんか。でも、それぞれ婦人会は上部団体があるし、フォーラム福島も上部団体があるので、そこがいろんなところから助成金もらったので、それでやってるらしい。

MY: でも、よく言われてる震災後に避難所でさ、女性は炊き出し無償。それで男性は外で瓦礫を処理して有償。おんなじ構造だよ。女性がボランティアで女性をヘルプして、ねえ。無償。結局、女性の仕事、ボランティアだったりね、介護であったり、育児であったり。この構造ってのは全く変わらないね。ねー。

TK: で、その女性会[館]協議会は、その仮設住宅でね、やるのに申請書書けて。私し難しいと思ったらA4一枚でいいんだから、必ず通すから、出しなあって言って。

MY: 必ず通すから、うんうん。

TK: 出しなあって言われて、それから仮設に移ってからね、その茶話会のお金とかお菓子代とか、お茶代とかね、一人時給1000円出すからって言うので、それで初めてお金をもらってやったのが仮設住宅の茶話会。

MY: そうだったんだ。

TK: それで、その後、仮設住宅もやっぱり夫の目とかね、近所の目があるので、話しても誰か聞いてるっていうんで、そこにいた時に女性会協議会に電話相談だったらね、布団かぶってでも電話よこせるし、電話相談。じゃあそれも大体半年って出したけれど、民間がやるんだしたら、だいたい3ヶ月だよって。そんな長いのは公的などがやるんだからって言うので、とりあえず3ヶ月って出したけど、3ヶ月では済まなくて。もう

一回で、結局9月から次の年の2月、内閣府が始まるまで女性会から協議会からお金をだしてもらって、やって、2012年の2月13日からは内閣府が…。なんかそうやってね私達振り返ると、そうだったんだなって、今更ながらね。先生にそんな風に言われると、あーそっか、それもそうだなって思って。疑問も感じないで、やってたんですよ。大した疑問も感じない。そういうもんなんだな、市民活動はって。

MY: そうだね、そうだね、その疑問感じないっていうか、感じさせられないことがあるんだよね。

TK: そうだね、そういうのまったく疎いので、全く感じず、そんな風に今までよくやってきたなと思います。

MY: 本当だよねえ。これからも続くよね。だって10年経ったって…

TK: そうなんです。そして、また新たに今度今若い人たちのね、DVの相談ダイヤルも始めたり、それから今、親からの虐待とか子どもからの虐待の人をね、一時的にでも、とにかくいる所と思って、今ちょっと確保して、一時的にあとは郡山市の生活保護を受けるのに一緒について行ったりとかね、そういうのをして。だから電話相談だけじゃなくて、こう発展してきてるので若い人達は忙しい。

MY: そっかー。

TK: だから、せめて電話相談くらいには行ってるんです。

MY: なるほど。今、若い人たち、若い人たちって話が出るけど、あのウィメンズ・スペース・福島は若い人が今だんだん増えてきてる。けど、あの苧米さんの世代の女性もいるでしょ。

TK: 半分以上。70代。

MY: 70代。うーん、その中間層はどうです？

TK: 60代が、中間層って言っても、60代だって高齢だよ、一番若いのが48ですから。

MY: あ、そー。

TK: 今養成講座をやっている人で20代の人がいるので、もうちょっと後、今日も夜、研修があるんですが、研修してもらって電話相談に入ってもらおうと思ってるんです。

MY: うん。あの、若い世代がね、興味はあるけど、女性支援とか、女性を応援することに興味あるけど、やっぱり食べてかなきゃいけないから...

TK: そうなんです。そうなの、生活できない。誘っても、給料いくらって聞かれると、「うーん、時給が1000いくらだって」いうくらいで、そしたら1日働いても6時間ですからね。若い人を誘っても暮らしていけない。

MY: そうなんだよね。いろんなNPOがそこがネックだって言うよね。やっぱり、若い世代に育ててほしい。でも、これで食べていけない。女性を支援して女性を応援する事で食べていけない。

TK: 自分たちが自立できないですから。人の自立を応援する場合じゃないんですよ。今年からね、県になったので、二人だけは常勤にしていいということで、今代表と副代表だけは、常勤で給料。あとは皆時給で。だから1ヶ月3~4万の話ですから、生活ができない。

MY: できないよねー。

TK: だから私達のように年金をもらって、夫もいてっていう人が何とかお手伝いをしないと、やっていられない。本当に半額にされた時にはびっくりしました。

MY: そうだね。

TK: だけど、誰も辞めずにやってきたのは偉いなあと思います。

MY: ほんとだね。今ね、その質問しようと思ったんですよ。苺米さん達にとって、苺米さんにとってかな、一番の最も大きな業績って何ですか。

TK: そうね、私未だにこう頼られるって言うかね。福祉センターに12年勤めていたので、母子家庭の支援とか相談してたんですね。私もう辞めてから12~3年経つんですけども、彼女達は困ると必ず電話をくれるのね。そして、毎年コロナではあれなんだけれど、毎年一回10人ぐらい集まって、近況報告をしたり、子どもがこんなに大きくなりましたとかね、そういう報告があるので、それは私も自分の子どもとか孫のようにかわいいし、心強い。彼女達と繋がっていくっていうのがすごく嬉しいことなので あと、

Iさんっていう裁判のね、加害者になった人も、何かあると連絡をくれるし、うん。だから、家族からはね、「なんだかお母さんいつまで何やってか」っていう声もありそうなんだけれども、娘も同じように感じて仕事を一緒にやっているので...

MY: うーん。

MY: Mhm.

TK: うん。彼女も勉強してるし、代表もすごく勉強して、彼女たちに渡せたっていうことが私一番大きなことだなと思います。

MY: うーん、そっか。

TK: 渡せた。

MY: 渡せた。うん。でも、彼女達は苺米さんの後ろ姿と言うかね、仕事を見て、いろんなことを学んで、続けてきた。それを引っ張ってきたんだね、苺米さん。長い。

TK: ぼんやりしてるので、みんな助けてくれた。ぼんやりしてるので、みんな助けてくれて、若い人はなお一層発展してるのですごく心強い。

MY: いいね、発展してるって言うのがね。希望が見えます。

TK: はい。だから続いて欲しいなと思うんですね。お金がね。

MY: うん。本当だよ。だから、女性が自立できて、自立した女性が女性の自立を応援できる。そういう仕組みを作りたいよね。

今の日本のね、フェミニズム。活動してる人たちもいれば、例えば大学で研究してる人とかもいるわけじゃない？

TK: はいはい。

MY: 何を期待します？ 日本のフェミニズムに。

TK: だから彼女達ももっとこうフィールドワークというか、外に。やっぱりこう今ね、街頭デモとか、そういうのありますでしょ。

MY: フラワーデモもあるしね。

TK: そうそう。大学の先生たちが出てるっていうことで、すごくこうアピールできるなあと思うんですね。あと、提言とかね。私達も請願をしたり提案をしたり議会に傍聴行ったりして議員とか議会にちょっとこうアピールしつつあるんです。

MY: うん、うん。

TK: そうなのにも大学の先生達の名前を連ねていただければ。あの、日本って特にほらそういう名誉に弱いので。

MY: そうそう、肩書とかね。

TK: だから、もうそういうのは、先生方が是非それを...利用してって言うと言い方が悪いけれども、それがすごく大きな力になるので。

MY: そうだね。

TK: そういう時に名前を出されて下さったらいいかなーと思って。

MY: そうだねー。で、名前だけじゃなくて、もっと活動に積極的に参加してほしいね。大学とか研究に留まらず、やっぱり女性の人権のためにもっと活動してほしいよね。

TK: 社会教育にも力を貸して欲しいし。社会教育が大事で、やっぱりね、こう大学の先生が来るんだってっていうと、皆ちょっと違うので。私が行くよりはすごく影響があると思うので、社会教育的にも力を貸してほしいなと思います。

MY: そうだね。これは以前にお話聞いた時におっしゃってたんだけど、もっどころ実務化？ 実践のできる人を育ててほしい。ね。カウンセラーとか。

TK: そうです。はい。

MY: フェミニズムの視点が入ったカウンセラーをもっと養成しろみたいな。

TK: そう。はい、そう思います。あのね、フェミニスト・カウンセリング学会の会員って、福島県は私たちが知るまでは一人しかいない。

MY: あーそう。

TK: そう。それで、それなのにも関わらず、2014年にはフェミニスト・カウンセリング学会の全国大会を私たち郡山で開いた。大したもんですよ。

MY: そうですね。大したもんです、自画自賛。

TK: 誰も会員がいないのに、すごい。言われて私は最初反対してたんですけど、私たちまだ力もないし、そんなのできませんよって言ったんだけど。「やった方がいいんじゃないの」って言う人がちょっと一人ぐらい多かったの。

MY: 多数決で。

TK: で、その後すぐ井上さんとか、事務局がいて、「どうも苺米が反対してるらしい」っていうので、来て、まあ、やって大成功でよかったんですけど。全国から200人くらい集まってね。あと浜通りのバスツアーをやったりして、大成功だったんですけど、最初はね、会員もいないのに、そんなフェミ・カンなんて知らないのに、全国大会なんてできないんじゃないの。お金も集めなきゃなんないし。でも、みんな頑張ってる集めてね、普段よりね広告収入いっぱいできて。

MY: あ、そう。

TK: やっぱりそんな全国大会なんて私たちやったことないし、みんなそれぞれ自分のお知り合いにね、声をかけてね、やってね。それはみんなからやって良かったって。

MY: いや、いろんなことにチャレンジして。

TK: ねえ。そうして思うと、色んなことがあったなあと思います。で、それが続いて行くなあと思うので、安心しています。

MY: そっかー。またちょっと固い話になっちゃうけどね、このプロジェクトがグローバル・フェミニズム・プロジェクトじゃない？ で、そのフェミニズムって、なんていうのかな、その活動とその研究ってさ、結構分かれてる場合多いじゃない？ 日本は特にそうなんだけど、でも、どういう関係にあるの？ なんか、すごい変な固い抽象的な質問だけど、苺米さんにとって、そのフェミニズム研究って、何か意味がある？ どういう？

TK: 特別ね、フェミニズム研究じゃなくて、知らなかった対等だったりね、あなたも私も大事な存在っていうのは、元々なんとなくは感じていたけれど、こういう風に言葉にしてね、自分のものとして理解できたっていうことで、フェミニズムを勉強しようとか、学会に入ろうとかっていうのではなくて、私の中で言葉に出来て理解ができたというので、大きな実りだったなあと思いますね。

MY: そっかー。さっき言われた「個人的なことは社会的なこと」とか、なんかこう、モヤモヤしてたのが...

TK: そうだったんだ。

MY: ...とストーンと落ちるって感じ？ そうか、そういう役割もあるんだね。

TK: だから、特に私学会にも入ってはいないんだけど、昔おじいさんに言われたようなことは社会的に女はね、三歩下がれとかね、三従の教え。子供は親に従い、嫁しては夫に従い、老いては子に従えとかね。男の馬鹿と女の利口がちょうど釣り合うなんて訳の分からないことを言って...。それ、なんだろうなと思ってた。そしたらフェミニズムに出会ったら、そうなのかって。これって世界的に政治的に都合のいい男たちが言ったことなんだ。そうなのかっていう風に、もう本当に60過ぎてから分かりましたよ。

MY: うーん。そっか。でも、ほんとそういうカラクリがあったんだよね。

TK: そう。そして本当にね。お爺さんの亡くなる時には知らない女の人がね、枕元に座ってたりね、一体これは何なんだと。そういう、だから、今生きてれば140歳くらいですかね、おじいさんはね。私の高校の頃はまた元気だったので。よく聞いとけとかなんか言われて。なんか変だな、なんだろうなーと思ってたけれど、60になって、フェミニストの人達と会って、言葉で、「そうだったんだ。それは自分に都合のいいおじいさん達が言ったことなんだ」ってわかったのが、60過ぎてなので、私もあの震災後に成長できたかなと思います。

MY: 素晴らしい。このインタビューを観る人、聴く人、全国、全世界の世界の人達に何か伝えたいこと。何でもいいです。

TK: あの一、PTGのことです。本当にね、震災があって大変だったし、辛い、大変な人たくさんいたけれど、それで出会うことができた。それから知ることができた。本当に

どんな時でも元より良くなる。そういうことがあるなあと思ひまして。PTGという言葉に出会った時に私は凄く感動しました。

MY: PTGを毎日実践されてるんですね、苺米さん。そして福島的女性。

TK: そう思ひます。今まで知らなかつたことで、電話相談の人にもアドバイスしたり一緒に考えようって言ったりね。今までだったら、他の人も一緒に「あんたも悪いんじゃないの」って言ったかもしれない。けどそうじゃない。あなたが悪いんじゃないんだ。これはね、男の人が都合のいいように言っていて、あなたは洗脳されてるだけなんだ。「そうですか」ってね、電話の向こうの女性が言ってる。それも私が皆さんに出会わなかつたら言えないことなので、出会えてよかつたなあと思ひます。

MY: そっかー。日本の他の女性的女性の団体とかグループとどのようにつながってます？

TK: 同じ県内の人達で、実際シェルターをやっている、小さいながらやっている団体からも連絡が来て、「郡山の人でこうなんだけれど、居場所がない」って言われて、それで私達一箇所、じゃあ、なんとかって、それを作ったし、それからいろんな団体、東京とか仙台からの団体から電話がかかってくる「郡山にこういう人がいるんだけど行ってみてくれ」って言われて、お会いしてお話を聞いて、けど私も今まで居場所っていうのがなかつたので、けど、つい最近一部屋だけ確保したので...。家賃も大変なんだけれども、彼女たちが自立できるように、色んな団体から言ってもらったおかげでね、こんな人が郡山にいる。他の市とかね、他の県に電話が行く、あの有名なlineにね。郡山の人には「私たち知りません」っていうわけにはいかない。っていうことで、なんとか一部屋ぐらい借りられないだろうかって、今1人入ってるし、あと...

MY: シェルター...。じゃ24時間。

TK: でもね、最初今その子はもう二ヶ月ぐらいいるのかな。だいたい一か月か二ヶ月で思っているんだけど、家に帰るのは難しいって言うので、最初は職員も一緒に泊まっていた。けれども、彼女は日中学校に行ったりしてるのでね、特に親からの虐待で逃れてきてるので、見つけられること、親と私たちの代表もお話をして、「今こんな状況だから預かります」と。もう「子ども返せ」とかなんと言ってはいるんだけど、本人も帰りたくないって言ってるし、もうちょっと本人がね、自立できるまで思っているんで、そういうのに繋がってきているんです。そして、そのために違うことの勉強も始めたり、違う助成金も取ろうとしたりしているの。それがやっぱり若い人はインターネットを使ったりして、探し出すので、私も良かったなと思ひています。

MY: ほんとだね、だから、その横のつながりも大事だし、他の団体とのつながりも大事だし、縦のつながりも凄く大事だね。あの、海外の団体とかとは何か、コネ？

TK: 海外というと、吉浜先生にこないだ出させていただいたこととか、今日のこととかで、日本の西日本でさえ、こないだまで知らなかったの、海外はまだ今回のミシガン大学に出させていただいたのが初めてなので、他の団体とは特に繋がりはないですね。

MY: わかりました。うーん。では、最後、今取り組んでいる課題？ 成長してきてるぞ、色々。いろんな新しいプロジェクトも始まっている。今、苅米さんたち団体が直面している課題はなんですか。

TK: やっぱり活動する資金だね。

MY: そっかー。

TK: あとは、職員の生活。それがあればもっと。だから結局、今二人だけは常勤にしたので、月給制なの。後はみんな時給なので、それこそ3万4万ぐらいの話ですのね。今のところは表立った諍いはないけれど、そのことで、きっとお金の問題ってね色々な所に波及するので、お金の問題で面白くない人たちが出るのが心配。実際、仕事は本当二人がもう休みなく働いて、それを見たら誰も文句とかね、できないと思うくらい働いてるんです。だけれども、分からないので。みんな問題だね。

MY: そうだね、結局女性も女性の団体も経済的基盤の弱さ。そこがネックだねー。そろそろ終わりに近づいてきましたけど、もう1回聞きます。言い足りなかったことを。これは絶対言いたいことがあれば。

TK: 何度も言うように、皆さんに出会ったことが大きな財産だったし、キャップとフェミニスト・カウンセリング学会に出会ったのが、私の経験の大きな裏付けになったと思って、感謝しています。吉浜先生や湯前さんにフォトボイスの手法を教えていただいたことも大きな力になって、何かあると、「ん？ 撮っといた方がいいかな」っていうふうに...

MY: 写真？

TK: 思います。出会いがね。

MY: そうだね。一緒に活動してみて、やっぱり写真を撮ることの意味っていうのをすごく感じましたね。何かいろんなことを気が付いても、写真に撮らないと忘れ去っちゃうていうか、流れちゃうんだけどね。写真に撮って、撮っただけじゃなくて、それをみんなと一緒に見て検討する時に色んな新しい発見があったりとか、すごく意味があるなって。今もね10年ずっとやってきて感じます。

TK: 出会いがよかったなあと思います。

MY: ありがとうございます。あのね、10年経ってやっぱり福島のことを段々忘れ去られかけてきてるじゃないですか。日本でもそうだし、世界中いろんな災害があって、いろんな事件があるから、なかなかみんなの記憶に留められない。どうですか。もっと福島のこと、福島のこの現状を知ってほしい。福島で起こったことの理不尽さ、いかに人権が守られなくて人権侵害が今も続いているって事。どうなんだろう。

TK: マスコミでもね、例えば沿岸部の高速道路が通りました。よかったでしたって言うけれど、実際はあの高速道路は「止まってはだめ。窓開けてはだめ。降りてはだめ。バイクは駄目」なのよ。車でみんな窓閉めてシューッと通るだけ。だけど、それ誰も知らない。未だに「窓を開けないでください。降りないでください。止まらないでください。バイクはダメですよ」なの。

MY: なるほどね。でもそういう報道がないわけよね。でも福島はその通過するっていう、そういう場所になってしまった。

TK: あれが通ったから便利になったでしょうとかね、観光地に行くのもいいですねっていう報道なんだけど、じゃあ、あなた実際に来て、あそこ通ってごらん。「止まってダメ、窓開けてダメ、降りてダメだよ」。それから、統計もね、県外に避難してる人、県内に避難してる人の統計が出るけれど、自分たちで家を買ったり、それから復興住宅に入ったその人たちはもう避難者じゃない。カウントされない。だから、今ね2万数千人だけが避難してますって言うけど、気持ちとしてはね、いくら自分が復興住宅に入っても私は避難者だって思ってたよね。

MY: そうだよな。だって自分の家に戻れてないんだものね。

TK: だけど、そういう人はカウントしない。県内に、それこそ郡山とか福島に家を建てて、だけど、気持ちは故郷にあるわけです。そういう人はもうカウントされない。だから、気持ちを汲むっていうことの作業を丁寧にして欲しいなと思います。

MY: そうだね。そして、またさっき話してた同じ構造だよね。自分たちに都合がいいようにね、何をどういうふうに定義してどうカウントするかっていうのを、自分たちの都合のいいように。敵は手強い

TK: そう。敵の思うツボになってる。

MY: そうだね。でもそれをね、阻止してくのは、さっき話してた女性たちの団結だったり、情報をシェアして、ね。

TK: そうだね。

MY: そうやって戦っていく、続けるということですね。それがフェミニズムというか女性達の運動なんだね。今日は貴重な話をどうもありがとうございました。

TK: ありがとうございます。